



「介護とはその人らしさを受け入れ、ありのままのその人らしさを認めていくこと」

佐久市下小田切にある特別養護老人ホームさくら苑は、南方に八ヶ岳、蓼科連邦、北方に浅間連峰を望み、千曲川に注ぐ片貝川の流が見える豊かな自然環境の地に平成 19 年 10 月に開設されました。

人生の先輩である入居者に感謝と敬愛の心をもって接し、笑顔あふれる毎日が過ごせることを基本理念とし、個室の他に 10 人単位のスペースを設けた、食事や団らんなど家庭的な雰囲気の中で自分らしい暮らしができる「ユニットケア」を特徴としています。

施設長として介護現場を支える霧生 悟さんは、これまで 20 年以上多くの利用者さんの生き方に寄り添ってきました。

“悩みや苦しみを抱えた子どもたちの力になりたい” そんな思いから、大学では社会福祉を学び、そこで経験した支援を必要としている様々な方との出会いから、卒業後は介護分野への就職を決めたそうです。当時は介護保険制度が成立したばかりで、介護分野はまだ新しく、色んな改革や考え方の変革があり、知らず知らずのうちに介護の世界に魅了されていったそうです。

〇これまでに心に残っているエピソードはありますか？

「以前、入居されていた利用者さんのプラチナ婚式を施設内でやったことがあったのですが、それがすごく素敵な時間で今でも印象深く覚えています。『お父さんとは 65 年近く一緒に過ごしてきたけれど、ドレスなんて一度も着たことがないよ』と話す奥様の想いを形にしようと、教会を作って、ご家族をお呼びして、みんなで祝福しました。お二人の姿が本当にとってもよかったですね。」

「特養に入居することは、あきらめじゃないと思うんです。夢があってもいい。行きたい場所や楽しみたいことをあきらめることなく、その方の想いや願いに寄り添い、少しでもいきいきと自分らしく暮らせることができる、そんな場所だと思っています。施設に預けることになったご家族も悲観的にならずにいてほしいと思いますね」

「その方のありのままのその人らしさを受け入れていくこと。認めていくこと。それが介護」

「転倒リスクの高い方が認知症から動いてしまい転んでしまうなど、大変なことは日常茶飯事。教科書にある通りにはいかないこともある。でもそれ以上に毎日が本当に楽しい。介護の仕事は、お一人おひとりの夢や願いをかなえ、その方の人生を輝かせることのできるそんな仕事だと思います。現場に行けないときも、看取りに近い方が今日を無事に乗り越えられているかなとか、気になってしまいます。もう介護は自分の生活の一部ですね。」



「地域とともにあり続けること」



○地域とのつながりを大切にしているさくら苑。これから目指す施設とは？

「地域とともにあり続けること。運営や経営とかではなく、地域の資源の一つになっていくことだと思います。『根ざした』とか、『支えていく』とかではなく、地域と共にそこにあり続けることだと思います。

例えば、この前も小学生が自転車の空気が抜けてしまい困った様子で来たので、空気を入れてあげたりとか、そんなことがありました。そんなたわいもない、小さな相談が気軽にできる、そんな場所でありたいと思いますね。うちは、目の前に小学校があるので、音楽会や運動会があれば一緒に応援してあげたいし、見守り隊の代わりに、『気をつけて帰るんだよ』と車いすのおばあちゃんが言ったりして。そんな日常の一コマにふといることが理想ですね。ここは特別養護老人ホームですが、高齢者の方だけの施設ではなく、子育て中の人や孤独な想いをしている人、引きこもりの人など、地域のあらゆる方にとっての多機能的な拠点になればと思いますね」



「それから、『老い』や『認知症』や『死』をタブーなものとしなくて、オープンにしていくこと。老いることを悲観するのではなく、ユーモアをもってエンジョイできるように、地域に向けて発信していくことも私たちの役割だと思っています」

(インタビューをしてみて)

今回インタビューをして、心に残っているのは『『老い』や『認知症』や『死』をタブーなものにせず、オープンにしていく』という言葉でした。このような考え方がインタビューの中で話されていた、施設利用者のあり方をそのまま受け止めること、その人らしさを受け止めていくこと、地域とともにあり続けることにつながっていくと感じました。

熱い想いをもち、今後の介護施設の在り方を熱く語っていた霧生施設長でした。今後も地域とともにあり続ける施設を応援していきたいです。